

教育長だより

No. 7

2021年5月18日

親の教育力に注目すべき

～ 学級担任をしていて気づいたこと ～

「私、担任していて（年度初めの）家庭訪問が楽しみでした。」と、こんなことを書いたら、「何ちゆうこと言うんや！」と、何人もの先生からおしかりを受けるんじゃないかとちょっぴり不安ですが……。何でこんなこと言うのかといいますと、私が38歳で大阪から滋賀県（近江八幡市）へ転勤して、中3の担任になった時のこととお話しします。

連休前の定例の家庭訪問（4月）で、ある男の子のお母さんとの会話です。（なお、どこのお家（うち）でも、始めは私の自己紹介。この4月に私が大阪の中学校から転勤でこちら（八幡東中）に代わってきたことを伝えています。そして、短時間ですが、学校生活や家庭でのことなどを話し合いました。最後の方で、「気になること」を尋（たず）ねた時のことです。）

母：「先生、うちの子、だんだん父親に似てきたんですよ。顔はそうでもないから良かったんですけど（笑い）……。このごろ何言うても『うん』とか『まあ』だけ。あんまり生返事ばかりするもんやから、私、『あんた、ホンマにどう思てんの！』って、ときどき怒るようになりましたわ……。ホンマ、お父ちゃんにそっくり……。先生、男の子ってこういうもんですかねえ。小学校のころはようしゃべってね。学校のこと、手に取るようにわかったんですけど……。」

私、この話聞いて思い当たることがありました。それは、その2～3日前の女の子の家庭訪問です。そのお母さんがまるで子どもさんと「うり二つ」。しゃべり方やしぐさまで、ホントによく似ていたんです。（本当は、子どもがお母さんに似ているんですけど。）母とその子の二人家庭でした。「親子（母と娘）ってこんなに似ていくもんなんやなあ。」と、つくづく思いました。特に女の子の場合、私が担任したクラスでは7割ぐらいがお母さんによく似ていました。こうした家庭訪問の場合、多くの家庭で対応してくださるのが母親が多かったのでそう思いました。男の子の場合、父親のことはお母さんからのお話（だんだん似てきたとのこと。）を伺うこともありました。

こんなことがあってから、私、家庭訪問が楽しみになりました。一人ひとりの生徒の様子から、その子のお母さん、あるいはお父さんがどんな人なのかが見えてくるようでしたから。（あくまでこれは私の個人的な見解ですが。）そして、『子どもは親の背中見て育つ』という言葉がありますが、「ホンマにそうやなあ。」と思うようになりました。

そして、ここからが今回の本題です。「なぜ、子どもたちは母親や父親に似てくるのか。」それは、子どもたちが接している一番身近な大人だからです。長い時間、それこそ生まれてからずっと一緒です。それこそ「空気のように」子どもは自覚することなく、「親」のすべてを学んでいきます。しゃべり方などの「見た目」だけでなく、考え方なども大きく影響を受けているはずです。（残念ですが、虐待の連鎖もその一つではないでしょうか。）

だからこそ、私たち教育や保育にあたる教職員は、目の前にいる子どもだけでなく、その保護者

さんにも注目し、「共に子どもを育てる」必要があると思います。そして、それは私たち教育者・保育者自身も、共に成長していくんだという視点も大切だと考えます。上から目線にならないためにも。

さて、私、こうした親子の関係を視覚化できないかと考えました。そして、たどり着いたのが、「親の影響力と社会性」（縦線）と「子どもの年齢」（横線）のグラフ（下のグラフ）です。

生まれたての赤ちゃんは、親の影響力100%です。それが保育園や幼稚園に入り、横の人間関係が少しずつでき始める、つまり、社会性が生まれてきます。例えば、保育園で隣の子が車のおもちゃで遊んでいたら、自分も同じものを欲しくなります。親以外の影響力がその子に働いてくるのです。小学校になると、友だち関係が大きくなります。子どもたちは学年が上がるにつれて、だんだん親の言うことを聞かなくなってきます。親より友だちのことを優先するようになります。こうして、親の影響力は次第に低下し、代わって子どもたちは友だちや周りの社会的な関係で自分の考えや行動を決めるようになるのです。（自立への道筋とも言えます。）そして、中学校ぐらいでこの関係が逆転し、親の影響力は次第に低下していきます。ちょうど思春期が親を乗り越えていく時期です。大人になってもそれは続きます。みなさんの考えや行動の判断基準はどうですか。圧倒的に社会的な人間関係の影響力が大きいと思います。職場や地域、あるいは趣味の関係など、多様な人間関係をお持ちだと思います。それでも、心のどこかに「親はこんなこと言うてたなあ。」と振り返ることがあるでしょう。私たちはそれこそ死ぬまで自分の親のことは忘れることはありません。そうやって少しずつ新しい自分を創っていくのではないのでしょうか。

つまり、保育園や幼稚園でも、目の前にいる子どもの指導だけでなく保護者さんの家庭の教育力を活用して「共に育てること」が重要です。園での子どもの指導と家庭の保護者さんへの支援が「車の両輪」となります。忘れがちな「家庭教育」ですが、園だけでなく学校も同じです。「保護者と共に育てる」そのために、保護者さんにも保育・教育の支援策を理解してもらうような働きかけが望まれます。

担任の先生は、目の前の子どもたちの指導でいっぱいだと思います。しかし、そこに「保護者の教育力」というもう一つの視点をあえてプラスすること、すなわち、校園の保護者支援です。子どもの成長や課題を共有し、共に育てていくこと。そのための日常的な情報共有や懇談、ちょっとした電話連絡だけでもいいと思います。それは管理職や主任、加配の先生方の担任への一声のアドバイスが大切だと思います。（家庭の教育力の強化）

